【北川の岩場　備忘録】

2016.2.13　rctK

1．北川との出会い

今昔物語のように、今は昔のことになってしまったが、北川がクライミングの対象として捉えられるようになったのは、日和田山の女岩のハングがフリー化され、その後、年月は定かではないが、日和田の禁止問題が持ち上がったころではないかと記憶している。

当時噂を聞いて興味津々で訪れてはみたのだが、その巨大なハング帯に圧倒されてしまい唯見て帰ってきただけであった。岩場付近は現在と様相が異なり、植林の丈はまだ低く岩の半分程度の高さまでしかなかったため、岩場は陽光に照らされて明るく開放的な雰囲気であった。当時は現在の「北落師門」あたりがトップロープでトライされていたが、私の実力では到底登れるラインではなかったので、そのまま行く機会を失っていた。ちなみに当時トライしていたのは、私にとっては雲の上の存在であった檜谷清氏等であると聞いている。

その後、1986 年にチーム・イカロスの故・志賀光則氏等により東京近郊における 5.12 への登竜門ともいえる「北落師門」、1988 年に野口俊文氏が「秋葉大権現」、堀越隆正氏が「錦ヶ浦」を完成させ、北川の岩場は広くクライマーに知られることとなった。精力的な開拓活動で名を馳せた志賀氏等は、当時アルパイン兼フリーで 5.10 を登るのも必死だった私にとっては皆クライミング界の煌めく星々であった。

そして、その後もたまに訪れはしたが、5.11 程度をトライして帰るのが関の山であったのは事実である。

2．仲間たちとの開拓とその後

私が北川と深い関りを持つようになったのは 1991 年頃である。仲間とともに通い続け、ほぼ登り尽くそうとしていた頃、その圧倒的なハングの空白部に何本か新ラインが引ける可能性を見出したのである。それからは、殆ど開拓クライマーの「ビョーキ」のようなものともいえるが、毎回高揚感を抱きながら 1992 年をまたいで私達は通い詰め、その結果できたのが現在ある「ミンボー」や「UV」である。その記録の詳細は岩雪 155 号と 167 号に載せられている。

その後の 100 岩場シリーズ「フリークライミング日本 100 岩場2関東」として出されたトポ集では、煩雑なラインや派生的なラインで特徴がないもの、隙間にできたもの、限定が強いもの等は吟味しながら整理及び削除し載せることとなったが、その後一部については復活したり、また新たに引かれたラインもある。

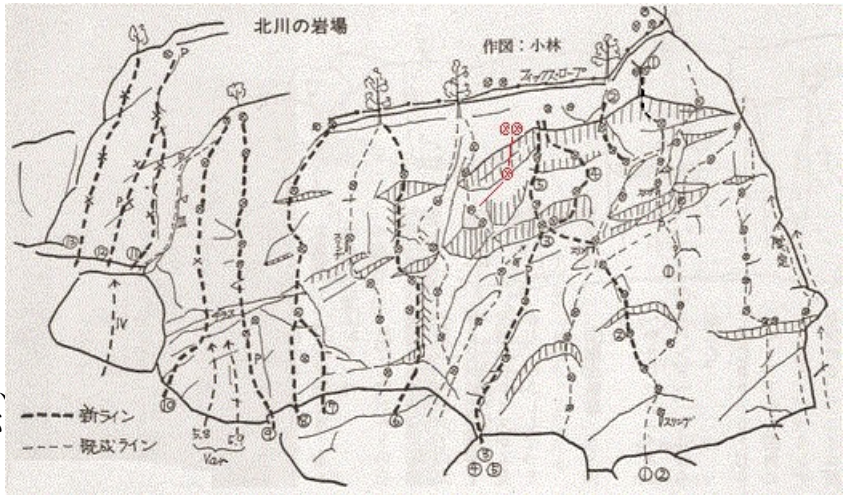
様々な思惑や経過を経て現在に至るが、削られたラインを含め、その何本かについて、当時クライミング仲間だった T 氏を偲びながら、その経過や今私が思うところを書き記しておこうと思う。また、北川の歴史を綿々と築き上げてきた多くの情熱的クライマーの後尾に、そのはしくれとして名を連ねることができたことは、多くの仲間や関係者による多大なる協力のおかげである。彼らに深く感謝の意をここで表したい。

加えて、周辺のボルダーについてもトライしたことがあるので紹介しておきたい。難しい課題はないが、まだ登れる状態であったら、興味関心のある方は遊んでみてほしい。

なお、ラインの引き方や質については、他の岩場の状況、雑誌やネットの主張、自らの経験なども含めて鑑みると、自分の言うことが絶対だというような狂信的カルトチックなものから、何でもありのものまで各人により見解の相違が甚だしく、この備忘録の意とは異なるため、この場ではあまり深く言及しないこととした。

今後も色褪せずに挑戦的クライマーを受け入れてくれる岩場であることは間違いないが、最後にここで、クライミングに理解を示し許可していただいた地権者の方と近隣の皆様に深く感謝するとともに、今後、この岩場を末永く利用させていただくために、クライマー自身が心してマナーの厳守に努めていく必要性を強く感じる今日この頃である。

※トポは岩雪 155 号に掲載されたものである（作図小林　一部追加）



3. 幾つかのルートのこと

●スカイ・ダイバー
トポ中の①のライン。
このラインは本来の「錦ヶ浦」の派生ラインとしてできたものであり、名前を「スカイ・ダイバー」としたが「錦ヶ浦上部直上ヴァリエーション」とするのが的確である。最後の派生的ラインは、最初「北落師門」の最上部直上となる「セイ・イエス(5.12a)」が拓かれ、次に「錦ヶ浦」の上部直上ラインとしての「スカイ・ダイバー」が完成したので、ライン取りは非常に煩雑となってしまった。故に、トポ集に載せる時点では、分かりやすくするため、「セイ・イエス」は削除し、「錦ヶ浦」初登者の堀越氏に敬意を表する意味で、「スカイ・ダイバー」は単に「錦ヶ浦」として、元の「錦ヶ浦」はオリジナルラインとのコメントを付記した。
さて、「錦ヶ浦（オリジナル）」を登って感じたのが、最後を右に逃げてしまうのは非常に残念という思いであった。下からハングを見上げると、どうしてもその尖った舳先を登りたいという気持ちが自然に込み上げて来たのは、クライマーとして当然といえば当然である。早速ハングの舳先を越えた上に終了点を設置し仲間たちとトライを始めた。最後のハング越えで何度も空中に舞ったが、何日かのトライの後、登り切ることができた。そして、ほんの数メートルの派生ラインではあるが「錦ヶ浦」の魅力と質は倍増したのではないかと思うほど感激感が満ち溢れたのである。
確かなところ、このラインを登るために北川に通うクライマーも多いのではないだろうか。

●ミンボー（トポ中の②のライン）
このラインは還暦にして 5.13a ルートを拓いたという奥多摩の伝説的クライマー名取氏のラインである。下部は最初「雨宿り」の終了点までの「雨の日は未完成(5.11c)」というラインであったが、その後、上部のハングにラインを延ばし「ミンボー」となった。トポ集では下部が派生ルート的であるため削除してあるが、現在下部ラインは復活している。グレードは下部を「ルンルンヒロシくん」の取り付きから登ると 5.12a となり、「北落師門」の下部から入ると 5.11d とするのが妥当である。
以前、上部ハング部分のホールドが一部欠けたとの情報があったが、詳細は不明である。

●CO2（トポ中の④のライン）
「UV」の完成後取り組んだライン。ムーヴ的には面白いのだが、「ミンボー」や「UV」のホールドを一部供用したので整理時に削除した。実はミンボーのホールドを使わずに登ってもいるのだが、限定という感じがありすっきりしない面もあった。空白部に無理やり引いたという感じがあるというのも理由の1つである。

●UV（トポ中の⑤のライン）
ハングの空白部で最初に目を付けたのがこのラインであり、早速ボルトを埋めトライを始めた。被りの強さで何度も空中に飛ばされたが、何とか最後はリップ付近へのホールドへデッドポイントしてクリアーした。最後のハング越えまで気が抜けない充実した会心のクライミングであった。

●バトル＆ピース(5.12b/c)（トポ中の追加した赤線のライン）

このラインは未公表ラインである。

「バトル」はハング越えがパワフルで非常に個性的なラインだが、ボルダチックとのイメージから抜け出せないため、もう少しストレニュアスなラインにならないかと考えて注目したのが、核心を越えてからハングをそのまま右上していくラインである。

上から懸垂下降で確認してみると確かなホールドが右上へと続いていたので早速ボルトを埋め、何日かのトライで RP した。その当時終了点は「UV」と共用であったが、ラインは「UV」に合流せず左側を抜ける。その後、暫くして訪れた時にハングの抜け口に終了点が設置されていたので誰かがトライしたと思われる。

他のラインと同様、最後はハング上に立ちこんで終了である。多分ボルトは腐らずに残っていると思われる。

古い CD を覗いてみると、トライ中の写真が 1 枚見つかった。日付は 1997 年 11 月 6 日となっている。トライを始めてからさほど日数は経っていないので、多分この頃に初登したと思われるが、記憶ではもう少し早かったような気が無きにしも非ず。もしかすると、その後に訪れた時の写真かもしれない。

●スカラベ（トポ中の⑥のライン）

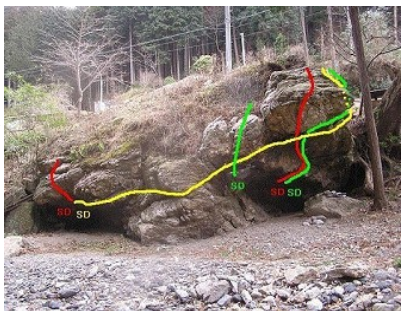
「謙譲の美徳」のカンテラインを真下から直上し、上部は「謙譲の美徳」に入らず左に出て、最後はハングを越えるライン。上部が限定気味なので整理時に削除したが、ライン自体は別で核心も違うので残しても良かったかもしれない。

●その他のルート

最終的に「日本 100 岩場」のトポ集から削除されたものは、上記 2 ルート（トポ中の④、⑥）以外に、「茶摘み唄ダイレクト（トポ中の⑦のライン）」などがある。それらは登って面白くないということではなく、上記したように、ライン取りの煩雑さと、ショートカットや限定的なもの、さらに無理やり空白部分に引いた印象の強いものは整理時に削除対象としたことが理由である。

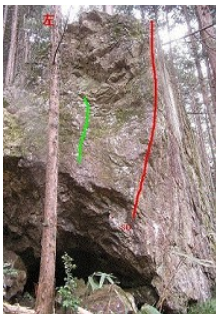
4. ボルダー

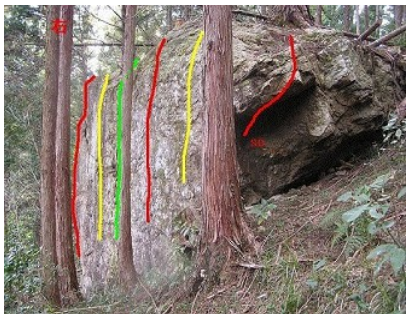
●川原のボルダー



このボルダーは、岩場への登り口と反対側に、道路から川原に降りたところにあるが、道路からは見えにくいので知らない者もいると思われる。SD 課題とトラヴァースがあるが、岩場から降りてきて時間があったら遊んでみるのもいい。

●岩場近くのボルダー





このボルダーは、岩場から西に少し行ったところにある。ハングの課題もあるが、全体的には細かなホールドの垂壁という感じである。ランディングがあまり良くなかったイメージがあるので、遊ぶならトップロープが良いかもしれない。

両ボルダーとも古い記録なので、現在登れる状態なのか不明である。誰もトライするものがいなければ荒れて苔が多量についている可能性もある